

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	23222002	研究期間	平成23年度～平成27年度
研究課題名	水中考古学手法による元寇沈船の調査と研究	研究代表者 (所属・職) (平成28年3月現在)	池田 栄史 (琉球大学・法文学部・教授)

【平成26年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)		
<p>水中考古学の手法を先駆的に行ってきた成果がよく窺え、その結果、調査域が国指定の遺跡に指定されるなど、その成果は多方面に大きな影響を与えており、高く評価される。それだけに新たな問題も抱えている。すなわち、国指定になったために今後の研究が当初の予定どおりには進まず、また、漁業関係者との関わりをどうするかなどの課題が生じている。その点は研究の進展に伴ってのことで、やむを得ないことであるが、今後の水中考古学の発展の基礎を固める意味において、基本的な問題点を整理して今後の議論のたたき台とするように図り、広く共通の理解、土俵が設定されるようにすることが望まれる。</p>		

【平成28年度 検証結果】

検証結果	
A	<p>当初目標に対し、期待どおりの成果があった。</p> <p>水中考古学の調査研究手法（音波探査手法）を確立し、2艘の元軍沈没船を発見して俯瞰画像を作成、また軍船が中国江南地方を進発した事実を明らかにしたことは、東アジア海域史の解明にとって画期的な成果である。</p> <p>研究成果も世界に向けて積極的に情報発信されており、今後は保存・活用手法の構築など更なる研究の進展を期待したい。なお、国指定や漁業との関係等は、水中考古学が常に対応しなければならない問題であるため、今後の水中考古学の発展のために、本研究で得た知見と残された問題点を広く議論してほしい。</p>